VELUX®
ROOF WINDOWS

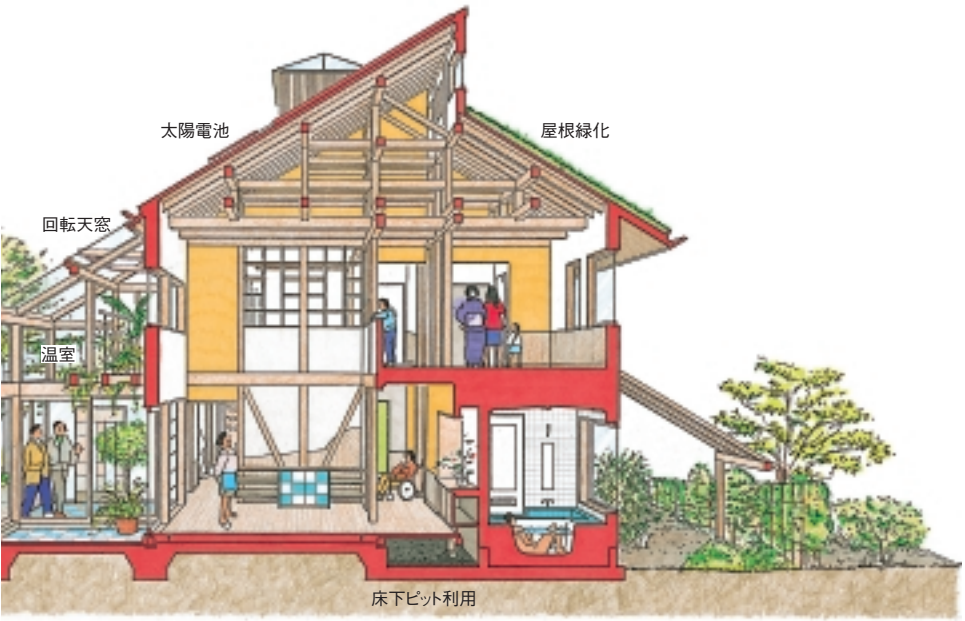
Light and Architecture
vol.2

ちきゅうむらの家／岩村和夫（岩村アトリエ） 4
泉佐野ふるさと町屋館／藤岡龍介（藤岡建築研究室） 6
夙川泉町の家／木原千利（木原千利設計工房） 8
寿町の家／竹原義二（無有建築工房） 10
府中の家／大野正博（DON工房） 12
あけぼの子どもの森公園／村山雄一（村山建築設計事務所） 14
麗伽杜―Legato／伊藤颯彩（atelier FROM ZERO） 16
林野庁置戸営林署／黒川哲郎 18

天と応答する窓。

「ちきゅうむらの家」（北九州市）温室内部見上げ。

ちきゅうむらの家／岩村和夫（岩村アトリエ）



「ちきゅうむらの家」横断面透視図

温室は北国の暮らしの夢から生まれた。陽光とガラスで南の気候をつくり、半戸外の明るい空間と、異国の動植物達のエキゾチックな雰囲気を愛でる。19世紀末の鉄とガラスの近代工業技術は、抗しがたい南への憧憬を、まずこうした特権的な空間の中に結像させたのであった。しかし、緯度が下がると夏の温室は暑すぎる。だから、完全に開放できる仕掛けが欲しい。もちろん、冬は冬で太陽がくれた温熱を閉じて有効に使いたい。それらを可能にしたペアガラスと開閉自在の気密な木製建具、そして蓄熱できる熱容量の大きな床や壁。こうして、温室は現代の住まいの透明で豊かな生活領域になった。さらに、温室には換気が楽な回転天窓が重宝だ。6年前に北九州に建てた「ちきゅうむらの家」。ここは環境と応答する住まいのしくみや工夫をちりばめた木造の体験型「環境共生」ミュージアム。熱的な環境条件の変化が激しい回転天窓だが、内と外、天と地のインターフェースとして、けなげに温室の気候を和らげてくれた。

「ちきゅうむらの家」南側外観

岩村和夫プロフィール

1948年兵庫県生まれ。1973年早稲田大学大学院修了後、フランス政府給費留学生として渡仏。G・キャンディリスの下で中近東、ギリシャにて建築・都市計画に従事。1977年旧西ドイツで設計同人を開設。1980年に帰国し、東京にアトリエを設立。10年来主に「環境共生住宅」の研究・開発・実践・普及に従事。1998年武蔵工業大学環境情報学部教授就任、千葉大学大学院・日本女子大学大学院・東京農業大学講師、現在に至る。著者に「建築環境論」「環境共生住宅A-Z」等。主要作品「自邸−カッセル・エコロジー団地」「世田谷区深沢環境共生住宅」他多数。

伝統空間に今、現代の光が差し込む、静から動へ。

右手奥は外蔵。
中庭は佐野浦の海を表現し、「白砂青松の庭」として，
活用時には中庭広場となる。

泉佐野ふるさと町屋館／藤岡龍介（藤岡建築研究室）

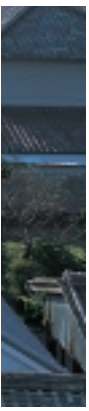
多目的なホールになってる外蔵の内部。

「泉佐野ふるさと町屋館」は泉佐野市が泉佐野市指定文化財旧新川家住宅の保存・再生・積極的活用を行うという目的で保存復原整備を行った建物である。

文化財指定部分の主屋・内蔵・前塀においては綿密な解体調査により建物の全容を明らかにしたうえで建物当初の姿に復元整備した。

一方、指定外であるこの外蔵においては研修・講演・展示・ミニコンサート等の利用が可能なように再生を行った。多目的に、しかも多人数の利用を想定しているため、空気の流れ及び採光を考える上で、屋根にトップライトを設けることにした。蔵の持つ冷たいイメージや窓のない暗くて圧迫感のあるものから、開放的で明るい光の差し込む空間となっている。そしてトップライトを通して外への広がりの感じられる外蔵に再生された。

新築の住宅や商業施設等多く使用されてきたトップライトではあるが、伝統的建造物の再生においてもかなりの効果がでてくるように思う。伝統的な町並みにおいて、暗くてじめじめしている古い町家においてもトップライトは有効であろう。先人たちの考えた明かりとり窓から一歩進んだ自由な発想で風や光を取り入れた快適な空間、快適な住まいづくりを考えたいものである。



藤岡龍介プロフィール

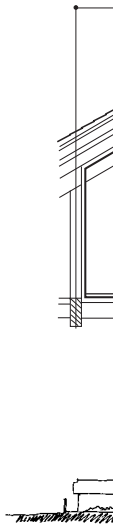
1952年奈良県奈良市生まれ。近畿大学理工学部建築学科卒業、水澤工務店勤務、降幡建築設計事務所を経て、1985年藤岡建築研究室を設立。

主な作品／ならまち格子の家、ならまち振興館、学研都市の家、本庄の家、吹田の家、堺の家、桜の庄兵衛、境川の家、他。

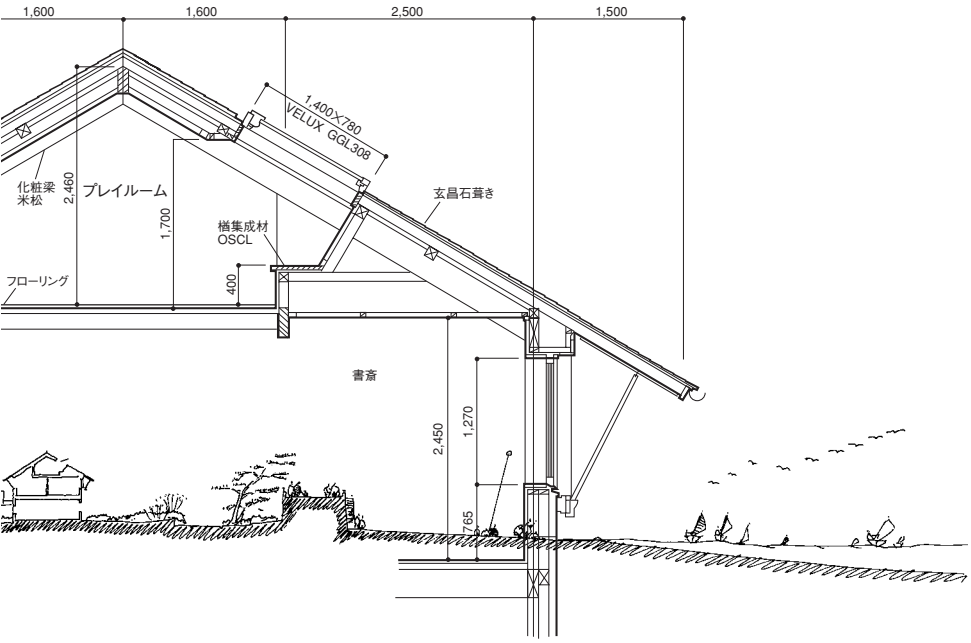
ベンチの上に光が舞う。海を眺める小屋裏の自由空間。

大きなトップライトから松の木が見える。

撮影：松村芳治



夙川泉町の家／木原千利（木原千利設計工房）



かつては西ノ宮の浜を眺める保養地で、「渚櫨荘」と名付けられた木造住宅が、建っていた。代がわりを考えておられたのだが、地震で建物が傷んだのを機に、建て替えを決意された。戦前の建物で、桜・松・欅・杉板等が使われており構造材以外は出来るだけ取り外し再利用を課題に設計した住宅である。

一階の居間ホールは8.2m×8.6mの大スパンでプラン上壁も少なく中央にスチールの柱を設けスチールの梁を十字に渡し、木造でありながら大きな空間を確保している。この柱を居間に取り込むようにS字カーブの壁を設け、ホールとの間仕切りとし、その中央部の曲率の異なる曲面障子を左右の壁に引き込むことにより、ホールを通して池、渡り廊下の奥の和室を居間からの眺めとして取り入れている。このホールはロフト階まで吹抜いており、ロフト階には家族が自由に使える部屋がある。屋根面につけた大きなトップライトから、松の枝葉越しに海が見え、河口際にはカモメやオシドリが舞う。トップライト下に設けたベンチに座り親子の会話がはずむ。音楽を聴く。読書をする。パソコン通信で楽しむ。友達とトランプ遊びをする。

明るく、風が吹き抜け、眺めも広がる三角屋根の自由空間である。

夙川泉町の家

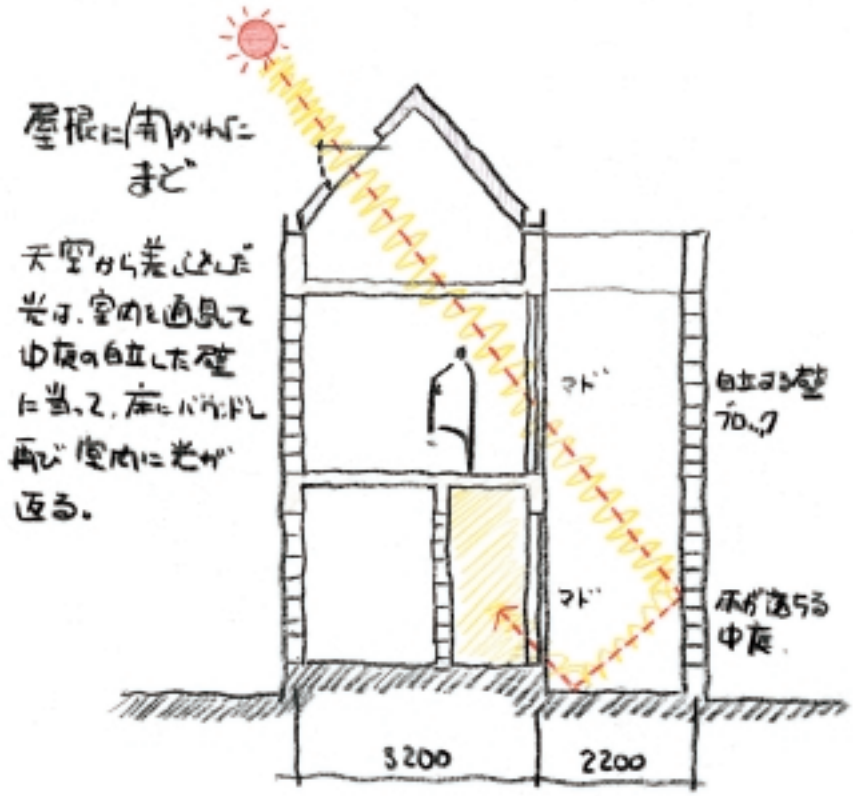
木原千利プロフィール

1940年大阪府生まれ。1972木原千利建築設計事務所設立。1995年木原千利設計工房に改称。1993年関西建築家大賞受賞。1997年日本建築学会・作品選奨。著書「住宅に生かす和風のディテール」（彰国社）。

都市の隙間にさし込む一条の光。

天窓が開けられると、下から上へと、風がぬけ、空気が動いてるのが感じられる。
それは、階段の吹抜空間により、上昇感を与えている。——寿町の家。

寿町の家／竹原義二（無有建築工房）



敷地は、大阪の近郊に古くからの木造長屋が密集して立ち並んでいる中にあり、まさに、その隙間にはめ込まれたようにこの家は建てられている。

実際に隣接していた長屋を切り離し、隣地との境界を内部よりブロックで壁が立ち上げられており、ここではこのような都市の中にどのような建築を入れ込み、さらに、どのように都市（外部）とかかわっていくかを考えている。

間口が5m、奥行きが22mという東西に細長い敷地のなかに建つこの家は真上からしか自然の光をうけられない。

この貴重な光源を最大限に利用すべく敷地はさらに細長く3.2mの内部と2.2mの外部に分割された。

南面の屋根に均等に5つ並んだ天窓より降り注ぐ光は内部を通り抜け、一度外部へと向かう。そしてそこにある隣地との間のブロック壁にバウンドされて下階の床面へと到達し、その空間に和らいだ光を膨らませている。

天窓の形に切りとられた光は,
時間の流れの中で、ゆっくりと移動しながら、
都市の中での生活で忘れかけている季節や時間の
うつろいを感じさせてくれる。

竹原義二プロフィール

1948年徳島市生まれ。1971年大阪工業大学短期大学部建築学科卒業後大阪市立大学冨樫研究室を経て、美建・設計事務所勤務。1978年無有建築工房設立。1984年大阪建築コンクール渡辺節賞受賞。1991年大阪建築コンクール大阪府知事賞受賞。1992年（社）日本建築士会連合会賞優秀賞受賞。1996年第9回村野藤吾賞受賞。1997年第4回関西建築家大賞受賞。1999年日本建築学会作品選奨。1988年～現在　大阪市立大学講師。

人工のスキマ風は、現代住宅の生命維持装置。

吹き抜けに取り付いたルーフウインドウは上下の温度差を利用して効率よく自然換気が行なえる。

府中の家／大野正博（DON工房）

小さめのルーフウインドウは点々と並べてやるとリズミカルな内部空間が出現する。
点窓と呼ぶべきか。

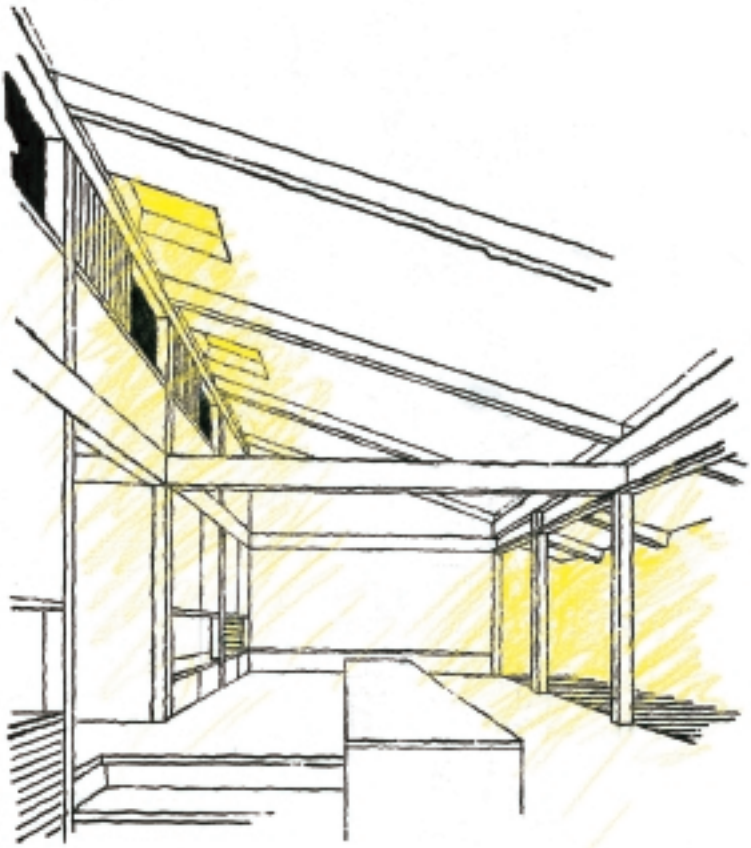
空間デザインは、人の心理を操作する作業である。

心理操作するには前提として、その空間に必要な機能と性能を満足させておかなければならない。室内環境で云えば、まず第一に空気の質である。水分とともに二酸化炭素を排出しつづける呼吸作用は、新鮮な空気を求めつづける。新鮮空気こそ健康の源である。

空気は肉体の健康を保つが、光は精神の健康に安定をもたらす。空間デザインは光に対する心理操作でもある。

トップライトは人の心理を天空に向ける。光を利用した心理操作の手段としては効果が大きい。天空光あるいは直射日光を採り入れて、なおかつ換気や通風も可能となれば肉体も精神も健康となる。小屋裏ならば避難口にもなる。

ベルックスの天窓はロックをはずしただけでスリット状の換気口が開く。高気密住宅の生命維持装置といったら大げさだろうか。



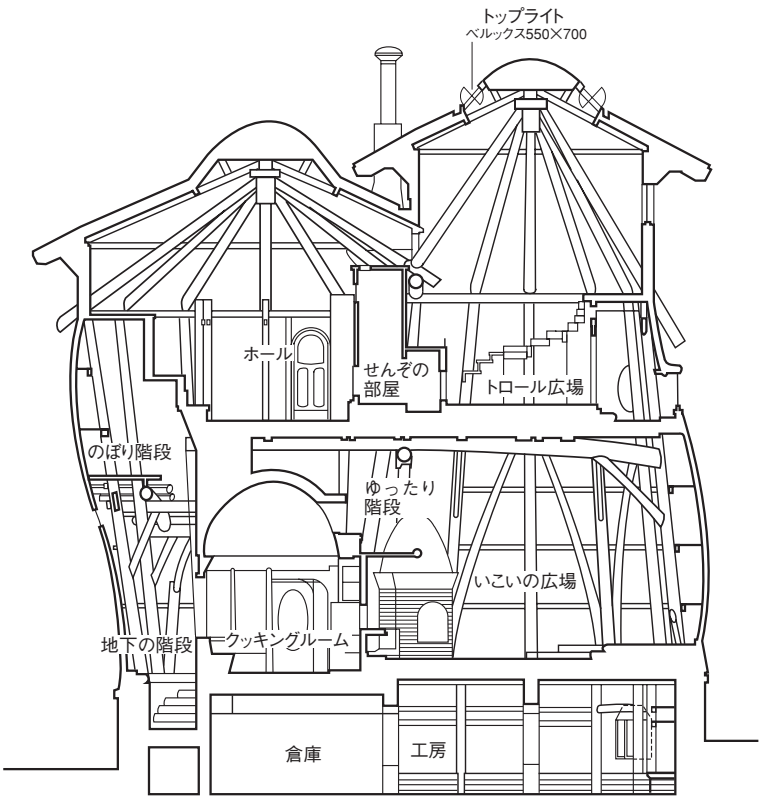
大野正博プロフィール
1948年東京生まれ。1973年DON工房設立。
1974年日本大学芸術学部美術学科卒業。
主な作品　集合住宅「屯」。

ひかりを求めて穿たれた窓。

飯能市、あけぼの子どもの森公園の風景。
自由な形にあけた穴のような窓・窓・窓……

あけぼの子どもの森公園／村山雄一（村山建築設計事務所）

子どものためのホール、向こうに見えるのは資料館。



子供の施設といえば、トンガリ帽子の屋根があったり、遊具があれば、こと足りるとするのは寂しい。大人が子供の喜びそうな何かを外的に与えるというのではなく、子供の魂を保護するという事を根本に据えるべきであると思う。

だから建物は人に安らぎを与え、心が自由に伸び伸びとなっていくようなものにしたい。そのためには、部屋は決して四角四面なものに限られるべきではない。人を優しく包み込みたいという意識を持って壁の面を展開して行くならば、その選択技は無限であろう。同時にこの自由さの中から、ひとつの答えを見出すという厳しさも伴う。天井の傾きを決めるのもまたしかり。そして、壁で包み込み天井で覆うだけでは、闇でしかないその場所は、壁と天井を穿って光を導き入れてはじめて生き生きとした空間となる。時に窓は人の心への光明の導き手なのかもしれない。

村山雄一プロフィール

1945年北京生まれ。1972年早稲田大学第一理工学部建築学科卒業。1972年木村伝建築設計事務所入所。1977年に渡独し、シュトゥットガルトにてR・シュタイナーの思想を研究するかたわら、ドイツの建築事務所に勤務、建築設計に携わる。1982年からウィーン芸術大学ホルツヴァウワー研究室に在籍。1984年に帰国し、1985年村山建築設計事務所設立、現在に至る。

マイホーム
舞豊夢でありたい。

麗伽杜—Legato／伊藤颯彩（atelier FROM ZERO）

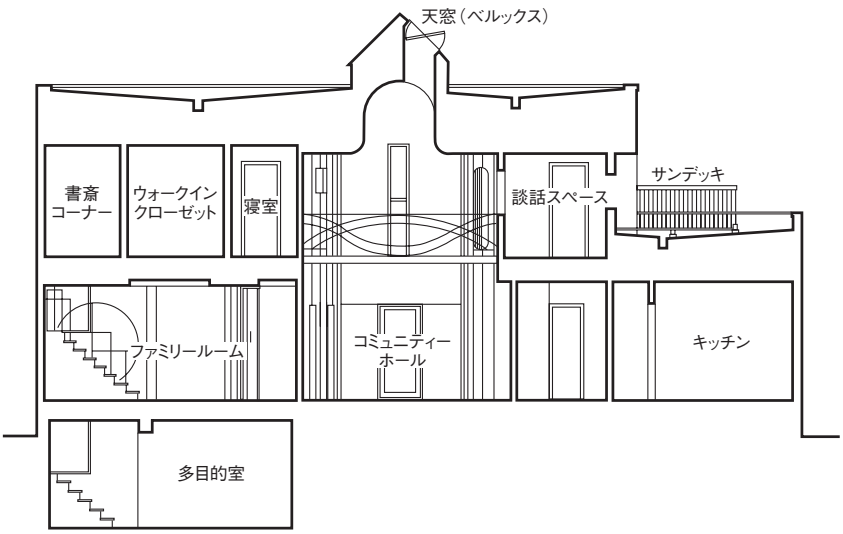
麗伽杜ーLegato
木漏れ日のような光が差し込む。

札幌の街中の喧騒から、日常生活をほどほどに隔離したいという住まい手の気持ちを尊重することが大きなテーマでもあった。

そこで、ゆっくりと大きくうねるファサードの佇まいや、内部の非日常的なデザインの展開、そして全体のモノトーン的な色彩の空間構成などによって、そうした環境にありながらも日常生活において、ゆっくりと流れる独自の時間を保持していくということを狙った。

そして、音楽用語から引用した「麗伽杜（レガート）—Legato」（音と音を切らずになめらかに演奏すること）という作品名の由来もここにある。

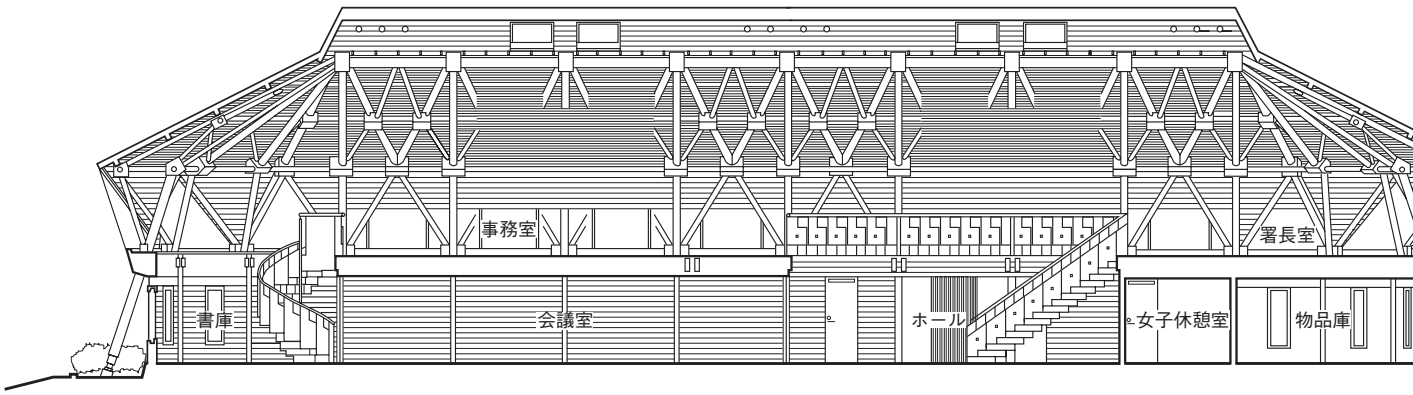
全体を流線（曲線）で構成する大きなヴォイド空間のホールは、天窓（ベルックス）の淡い明るさを主に、その空中を横切るブリッジやモザイクタイルの大胆な壁面、ビードロステンドの装飾などによって、静寂な空気の中にもダイナミズムと何となくエキセントリックな幻想風景をイメージした。



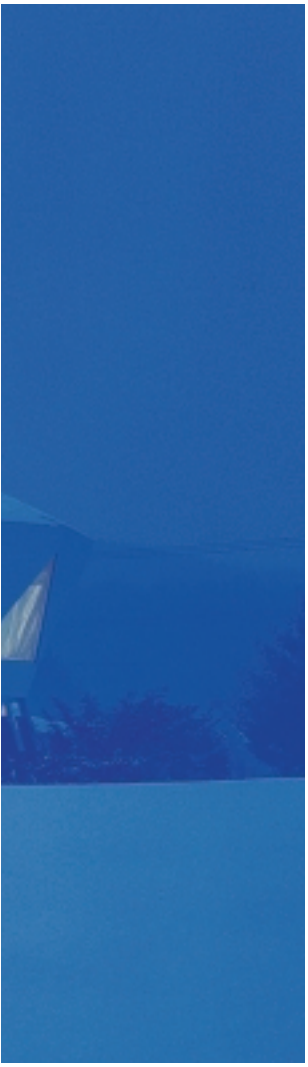
伊藤颯彩プロフィール
1949年北海道生まれ。
1970年北海道産業短期大学建築学科卒業。
1973年atelier FROM ZERO設立。

建築の中に自然をオブジェとして読み込む。

ガルバリウム鋼板で覆われた外観は、地上に舞いおりたUFOを思わせる。



林野庁置戸営林署／黒川哲郎



木漏れ日のような光に満ちたドメスチックなオフィス空間。

地場産材のエゾマツとトドマツの丸太を集成材のジョイントで立体トラスに組み上げ、カラマツとアサダで仕上げた「林野庁置戸営林署」は、スガ漏りを防ぐ為の五角形の断面の頂部に、雪割りならぬ雪を建物の外へ整流する棟＝スタビライザを突出させている。

北海道北見地方は冬には−30度、夏には+30度と寒暖の差が激しい。冬は棟の内部に集まるストーブの廃熱をダクトで回収して床下に送り込み、ベリメーターゾーンから再び室内に送り出す。一階の床下の蓄熱層は暖房の止まった夜間の零下への冷え込みを防いでいる。夏は棟の給気筒から吸い込んだ明け方の冷気を蓄熱層に溜め、午後の炎暑時に室内に送り出す。日中の暑さを和らげるのは排煙を兼ねる棟のベルックスの天窓である。

透明感を与えて一対に設けた天窓からの光は、丸太の構造体の中を木漏れ日となって降り注ぎ、傾斜した外壁の開口からの地照りのような光とともに、執務空間を住まいのように落ち着いて、親しみやすいものにしている。

黒川哲郎プロフィール

1943年中国・北京生まれ。1966年東京芸術大学美術学部建築科卒。1968年同大学修士課程修了。同大学助手、講師を経て、1989年助教授。1979年より、デザインリーグと協同して集成材や丸太を使った木造建築を中心に、住宅や様々なコミュニティ施設の設計を行っている。代表作に壷中天地V／柏木邸、樹木希林の家、タイム・スペース・アート、上野動物園前派出所、吉祥寺駅前駐輪場、上津江村診療所・保健センターなどがある。著書に、建築光幻学−透光不透視の世界（鹿島出版会）、まど−日本のかたち（日本板硝子協会）などがある。

VELUX®

ベルックスの情報は、インターネットでも提供しています。
http://www.velux.co.jp
E-mailアドレス:info@velux.co.jp

日本ベルックス株式会社

本社
〒151-0051 東京都渋谷区
千駄ヶ谷1-23-14
ベニーリーフビル
Tel :03-3478-8141（代）
Fax :03-3478-8147

札幌
〒003-0024 札幌市白石区
本郷通7南3-15
シティスカイコート2F
Tel :011-864-4761（代）
Fax :011-864-4760

仙台
〒981-3133 仙台市泉区
泉中央1-34-6
アルファートムビル3F
Tel :022-373-8831（代）
Fax :022-373-8854

名古屋
〒465-0095 名古屋市名東区
高社1-266
ラウンドスポット一社4F
Tel :052-773-3517（代）
Fax :052-773-3572

大阪
〒532-0011 大阪市淀川区
西中島4-6-24
大拓ビル9 2F
Tel :06-6300-5036（代）
Fax :06-6300-5206

VJ0201-6004®VELUX is a registered trade mark© 2000 VELUX GROUP